序

江戸奈良茶撰

一男もすと二のきいてをられのすさまじ
きようあくこのうそと始終ふくとよろ
て宮ゐるくろに能周うそといふまし
ゐもまる人の旅をる道の記をつくりて
うそを百人ゐくふるり甚うそうを
去年一文戈の拙きかんちゆめいやさい
見人のふ運りよる旅

一記中事と志るもろ無し筆者ゐ事の心
ゐり あくに旅人士明らかにもをもし

一旅人はかろのふ〳〵すて士朗うへ
ゐあ〳〵みちひこの思を士朗うへ〳〵ゐ
ゐる兩吟の一卷　主客の位を齟齬
せるを見る

ゐも〳〵東海道の紀行あるてあるふへう
ゐ〳〵うきよつ丹蛙をきゐ〳〵ゐるそ
ゐる人のあとなつあるを〳〵ゐ春四ゐ
ゐ〳〵ゐんと井を思ひゐ男伴なるふ人
ふゐゐゐ足つゐとゐんとてつてゐ
ゐりあ〳〵ん以ゐも頭はまゐゐを
ゐんゐ〳〵の茶屋者信實の念佛上人
じへの月の家〳〵さへ同〳〵見むゐゐ
よかあゐもと享和紀えのとゐ〳〵ゐ
あゐゐ〳〵ゐあゐ〳〵ゐの覚東ゐゐ
より馬ゐのふんまつ歩ゐてゐ

いろめ〳〵思ふ事ども書そへて　士朗

熟田の神をうふすなりとうるはしく書ハ
まうでゝの里事家のさと知辺の市もハ
たゝの寺も常ゆり賞てふゝてをそ
もるりゝ

赤川をゆくとて

みのゝ国の彫りうるゆ事の図
とゝ大ゆりゝ吹する人ありけるをそ
ゝ見ハ国嵩の卓池しけりのうゝ
しなりあんまの旅舞をとゝもせん

迷ひとあてかゝるけ山ゆる郷ひ山ゆる

よ〳〵田へもゆる

長百二十間の橋あり此ゆ源ゆ高ゆのゆ
ゆ長ゆの根を流ゆて滝川ゆりとゆるゆ
人〳〵善光のゝ寺ゆ参ゆるまゆ
ゆゝゆ〳〵よりあゆゆ
ゆゝと滴るところまゆて
千里の思をなゆゝるハ

ゆくとゆて前途

伊良虞嵩十兄へ

たゆまるのゆ〳〵ゆの世ゆ

道[illegible]の浄瑠璃を見る新町なくて天竜
をすまして[illegible]わたる
市よりの帰山りなく思ひゆくもまよへる旅
人をたとたとるなく命をうりとり
よめるもあるまれりさまくのことを思
つけてまたて三年一休ふ
よろこ猟り花のこのけある山路哉　士朗

袋井

同月の茶人のうるはしの名
すこしさく道すがらうり大猪川　松兄
[illegible]とあるて[illegible]おもしろ

這出て芽も茅も物よりの山　士朗
[illegible]
[illegible]
[illegible]

宗長の墓所にてやいとこそ

倉橋山ふもとにうる春の雪　卓池

今ぞ見えそらもうへうふこの山　士朗

うとの宮許奴美のこふ清うきさまうつる

三保のまつ朝暉夕陰象千萬ちり

定福寺

宗祇を葬し所自画自讃を掛

こつ地くいきのみけちかく

きくはなの公ぬと　世ちうさと

ふるまれめるる

世ちふるいさちり生ちきの高り哉

かる記念をいとなきしはるの宗長もそをあはき

とよとなきなりの家もいつとうはるの

ゆとりちくさと例の金仙上人の屋声り

庭さて面白ちうとやてもめる

そちふる屋

鶯の声のふりさて立る青うれ　士朗

そこ見ちうのあとちそ見あちく

春のうの永ちも寺ぬ貧の礼　松兄

大磯ちくる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

申月十五日富士見時雨馬戸川
四日漁魚つる子の浦より三ましり
富士を見る者の人も懼れふるまふ
のちかたたる
清水のまみ川より来れり三人
酒八ふ瓶あり十のうちふ瓶
夕日繁茂りいる
高くまして芝生くさむら戦
望先わりとしかの島山
戸川や海ゆくく山さく

松尾
卓池
士朗

陣り十萬ゆしをまとひて屋
のまよてふ二りのほく年とそ
新い雑もつるとかく
ふるひたふ舟とうまて舟
ちくゆやすし屋集をあるな
乃一文ゆをもさうり
いとうゆ人ゆ鳥ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

集名[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]とあるハ[illegible]ひし常[illegible]ハ[illegible]
吉田の法師う相[illegible]
[illegible]
[illegible]
へハ薪の中り冊[illegible]
あひ[illegible]
[illegible]ハ殺風景[illegible]
[illegible]
又之[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
て留學第一の審詩し人このことをもを
知りたれハ翌月の村り為穂を拾ふのそ[illegible]し
なく野狐等を隨しして五百生をふるも得ふせ
ずあるなりたれなもやく此異を拾ふい斷橋の
もをるもり翅をこのまれ寸るく百尺竿頭りはし
す自由自在なるやし今や鬼神とよそるし
屋敷の人り對する赤鬚胡の面こ古の
ゝゝを肝に入てうりるも記わりちゝ古ゝ[illegible]

[illegible]
右の尿概色生放膽文記行のるに預ゝん
といへるをそり人り對するり詞るとも
て載てこりあるり筆者の揮拳り
ゝるのゝ

一珍客江戸見物之事
一発句賜答無用之事
一席上書畫停止之事
一人品令不論貴賤事

三月八日

全令合物之

墨田川舟中

墨田川舟中にて
ちるもをしまれて
中人なる内事をあるべきなれ
いとまうつりつとひ事
まして詩り合をいと詩も所なるさくりの
首尾の松のほとりにて
しハとをこのりにて

伊勢 青川

成美亭

年々のかたり草
事きわまりなきすてるすまき　士朗
狩る蒜の新集多き春霞　成美
酸をなめるやうに天気哉　青青
ちいさなる月の小舟をひきめぐり　朗
木賊うる角印寄るうるし　美
窓ふさぐ湯射みふるるて　青
宗祇をとし咄をとて　朗
　　玉

惜まれて寄る眼ぬめ　青
孫ありとも尉ハ　朗
家もなる名うの茶湯見て　美
年の光うり寄る岩の百　青
一寸ハ山ほどこうの月　朗
色合ひ月の果もるる　玉
遠ひうす海うり似るたうまて　青
ふ来すふくの名ふるかくく　朗
何とも色とも有のちる　美

去年の時雨の
のこりまと春を
待しえそめる梅の
笠時雨さそふ
吉内も吉沢も
一人機に
世縁寺の本堂を
かこむ
月を見る
新しく家
人をまつ

考
朗
義
考
朗
義
考
朗
義

月をうし旅の
菊とり来る
題月を
月の
わるくち雑物
おそうて二人
鄭ふりの袂
小さき橋の
咲ぬり風も

考
朗
義
考
朗
義
考

序の作をしたそうの句　　筆

各務十二句

花の咲くるぜのまとうえてぜの林とこそうひ
ぜちきい又ほそすんとを別世界のぜをえ
りゆくふるしとぞ郭りをくく降
まをそをといいうをいいたかうを思うのを
豆しのおてのをの句

ゆとはうをうをぜのうをを
服をすりなのをを蔵をうゆる
とをかも雲雀囀る田をほを
小しのをまたた萌す土を
者をの名をを用をする動をん
千竹を白さ蕊りをよく
蔵まをの命をうをひし深蔵り
京明紀川のふをかをけき
節分の鰯の集るのををうを

みをを　士朗
光
朗
光
朗
光
朗
光

ちこをのせる風おさへぶ　朗
おろうさをほろけ仏と呼ぶれて　孝
終の夢覚りきる拝しる　朗
五月雨ものすごしまも月いかるし　孝
をりく是をあふふ池を　朗
まろ行き初のくるくるる山の奥　孝
時雨月連歌あるむ句　朗
茅柿を強ふふりの旅に居て　孝
見えるるいかやすきをき　朗

まろ屋に何の見ひのあるをくん　孝
一座のちきものてうまと掃きす　朗
庇すこを貴て病れいうる月重　孝
歳も寶の人あきりちゆく　朗
庵くこ時時雨の志ふふほくと　孝
居ふて寒ふ名和り鶏　朗
百ちをちきり捨る交ぶう　孝
鉢りおりと吟一のまちとの　朗
ふとハ隆一時雨の音の吟巻て　孝

芦も枯ふす荻のうら波　秀
引汐や又すゝけあるありを　朝
舟岡山の雲にくるゝ　秀
蝙蝠ゝてゝ〜ぎたる夕ゝけり　朝
すゝ野の二人自刺して居　秀
何るも鄙の伏家の面白い　朝
ほりうゝの水野ゝ苗の州　秀
蝉ゝる花のことをやのを　朝
三月　ゝ自ゝ陽をゝる　秀

巣北斗傳の筍をなくる大さ都ゝ牙の
ゝゝ
一薫一品を知す月餅のありさまゝ宵る
あ多洲濱みのゝて五葉の松葉をたゝし
ゝゝ何ゝ煉ゝ味最上仙
傳ゝ
其外ゝゝけゝふ紙ゝるのゝ
なゝいゝゝゝ
金令連のあゝゝ深ゝ無ひすの富の
ほゝゝ大手の別業左酒軍ゝゝ
ゝさゝいゝ戸の業沒ゝ好すまれ手

内印

来る日くるるまでは筆
硯を続りとあるまゝ信天翁
むゝ三月十七日